

二重主語構文「XハYガZ」の習得における母語の影響 —構文と意味的制約の相違に着目して—

小口 悠紀子

1. はじめに

学習者が第二言語を習得する際に、母語の特徴から影響を受けることを母語の影響という。母語の影響は、言語のあらゆる領域に様々な形で生じ得ることが知られており（白畑他 2010）、第二言語習得に影響を与える重要な要因である。しかし、母語における特徴が学習者の習得に及ぼす影響について、類型論的に異なる複数の言語話者を対象に調査した研究はまだ少ない（Odlin 1990；Nakahama 2011）。

そこで本研究は、主題の卓越性という観点から類型論的に異なる言語である英語と中国語を母語とする学習者を対象に、言語間の相違が習得に影響するか、二重主語構文「XハYガZ」を取り上げ検討する。

「XハYガZ」文にはいくつかのタイプがあることが知られている（菊地 1995；野田 1996）が、ここで問題にするのは（例 1）に挙げるように、所有文の名詞句+「ノ」が主題化したことにより派生（三上 1960；菊地 1990）した構文（例 2）である。一般的な日本語教科書では初級レベルで導入されるものの、その習得実態や習得に影響を与える要因についてはほとんど明らかになっていない。この構文は、文頭の名詞句が主題として捉えられ、「主題（Topic）-叙述（comment）」構造を成すことから、主題卓越言語（Topic-comment language）の典型的な文であるとされている。日本語のみならず、韓国語、中国語、インドネシア語など、ほかの主題卓越言語にも類似した構文が見られる（Li and Thompson 1976；益岡 1987）。

（例 1）象は鼻が長い。（XハYガZ：二重主語構文）

（例 2）象の鼻が長い。（XノYガZ：所有文）

一方、主語卓越言語（subject-predicate language）である英語など欧印語²には、この構文を成立可能にするための文法的手段が存在しない（Chafe 1976；Li and Thompson 1976；益岡 1987；尾上他 1998）。ここから、母語における構文の有無が日本語習得に影響すると仮定すれば、主題卓越言語である中国語を母語とする学習者は、主語卓越言語である英語を母語とする学習者より、日本語の二重主語構文の習得が促進されると考えられる。ただし、中国語の二重主語構文の場合、構文内のYに含みうる名詞句の性質に制約があり、親族関係を表す名詞が許容されにくい（尾上他

¹母語の「干渉」、「Transfer（転移）」、や「cross linguistic influence（異言語間影響）」などと呼ばれる。言語習得にプラスに働くものを「正の転移」、マイナスに働くものを「負の転移」「干渉」と呼ぶこともある。（迫田 2002）

²ここでは益岡（1987）に倣い、欧印語とする。

1998 ; 望月・望月 1999 ; 澤田 2010)。このような学習者の母語における意味的制約が日本語習得に影響すると仮定すれば、中国語を母語とする学習者は、日本語の二重主語構文においても親族関係を表す名詞句を許容しない可能性がある。

以上をふまえ、本研究では二重主語構文に関する (1) 構文の有無、(2) Y の意味的制約という母語における特徴が第二言語習得に影響するか否かを明らかにする。

2. 先行研究および研究課題と仮説

2.1 日・中・英における構文と意味的制約の相違

三上 (1960)、菊地 (1990) によると、二重主語構文とは所有文の名詞句+「ノ」が主題化したことにより派生した構文であることは先に述べた。本研究が対象とする学習者の母語のうち、中国語と英語には所有文「X ノ Y ガ Z」(例 3) に相応する構文が存在する。日本語は主題 X に所有標識「ノ」が、中国語は所有標識「的」が(望月 1974)、英語は、所有標識「s」が付与される(例 4、5)。

(例 3) 山田さん の 眼鏡 が 割れた。

(例 4) 山田先生 的 眼鏡 破了。(中国語)

山田さん の 眼鏡 割れた

(例 5) Mr. Yamada's glasses broke. (英語)

一方、二重主語構文を見ると、中国語には(例 7)のように日本語の二重主語構文(例 6)と類似の構文が見受けられる(木村 2002)ものの、英語にはこれに値するものが見られない(尾上他 1998)。

(例 6) 李くんはお腹が痛い。

(例 7) 小李 肚子 疼。(中国語)

李くん お腹 痛い

(例文は、木村 2002 : 215 より引用)

そもそも当該の「X ハ Y ガ Z」文を成立しやすくするファクターの一つとして、述部 Z の内容が X (あるいは話し手や聞き手) にとって重要なものであることが指摘されている(菊地 1990)。このことから、Y に入る名詞句は X への何らかの関与性が必要となる。益岡 (1987) は Z が事象叙述 (出来事、または静的事態を表す動詞) である場合に、Y に入る名詞句として、X との関与性が高いものから「所有物」と「親族関係」を挙げている。

(例 8) 山田さんは眼鏡が割れた。(Y が所有物)

(例 9) 山田先生 眼鏡 破了。(中国語)

山田さん 眼鏡 割れた

(例 10) 山田さんは 娘が 結婚した。(Yが親族関係)

(例 11) ??山田先生 女儿 结婚了。(中国語)

山田さん 娘 結婚した

(例 8) (例 11) は日本語ではどちらも許容される文であるが、中国語の場合、この関与性の制約が日本語より厳しく(澤田 2010)、(例 11) のように Y が「親族関係」を表す名詞句の場合、許容度が下がる(尾上他 1998)。この背景には、中国語ではある人物を描写する形容詞や自動詞があくまでもその人物のみを表すものであり、他の人にまで及ぶほどの機能は持たない(木村 2002) ことがある。つまり、日本語と中国語は、二重主語構文を持つ点では共通するものの、Y の意味的制約が異なる。

以上をまとめると、表 1 のようになる。ただし表中の「○」は許容されることを表し、「??」は許容度が下がることを表す。「-」は該当するものがないことを示す。

表 1 日中英言語間の構文と Y の意味的制約の相違

	所有文の有無	二重主語構文の有無	Y の意味的制約	
			所有物	親族関係
日本語	○	○	○	○
中国語	○	○	○	??
英語	○	-	-	-

2.2 第二言語習得における母語の類型論的特徴の影響

主題卓越と主語卓越という類型論的な言語特徴が第二言語習得に及ぼす影響に焦点を当てた研究は 1980 年代より英語習得を中心に行われてきた。日本語と同じ主題卓越言語の習得研究には、英語母語話者の中国語習得を対象にした Jin (1994) と韓国語習得を対象にした Jung (2004) があり、二重主語構文もその調査項目に含まれている。

まず、Jin (1994) では中国語での口頭インタビュー、物語描写、自由作文課題を対象に、Jung (2004) では韓国語作文を対象に、二重主語構文の使用、ゼロ照応³の使用、主題標識や裸の名詞⁴の使用など主題卓越言語の 3 つの特徴の産出割合が習熟度に応じてどのように変化するか横断的に調査を行った。その結果、最初は主題が卓越した特徴が見られず、むしろ主語が卓越した特徴が現れたが、習熟度が上がるにつれ、二重主語構文、ゼロ照応、主題標識や裸の名詞など、目標言語に沿った特徴が現れるようになった。しかし、いずれの研究も調査対象となった項目のうち二重主語構文の

³ 「ゼロ照応」とは、既出の要素が省略されることを言う。

⁴ 「裸の名詞」とは冠詞や指示詞を付与しない名詞のことを指す。

産出については、徐々に増えていく様子が観察されたものの、その使用頻度は数例に留まり、母語話者の使用頻度に達することはなかった。

Jin (1994) や Jung (2004) の研究は、習得初期に学習者から主語が卓越した構文が産出されたことから、母語の類型論的特徴が主題卓越言語の習得に負の影響をもたらす可能性を示唆した。しかし、主語卓越言語である英語母語話者のみを対象にしているため、母語の影響を主張する証拠としては不十分である。また、二重主語構文の使用の観察が主題卓越言語の習得をはかる証拠の一つとなるにもかかわらず、比較的自由的な産出課題においてはこの構文の産出を観察することが難しく、十分な検討が行えないという限界も示された。

なお、第二言語としての日本語習得研究において、二重主語構文を対象にした研究はないが、同じ主題卓越言語の特徴である主題標識の転移可能性については検討されている (Nakahama 2011)。Nakahama (2011) は習熟度が異なる学習者に発話産出課題による調査を行った結果、主題標識を母語に持たない英語母語話者は主題標識を持つ韓国語母語話者と比べ、その習得が遅れることを指摘している。

2.3 先行研究からの課題

以下に、先行研究に残された課題を2点述べる。

まず1つめに、母語における特徴が学習者の習得に及ぼす影響について、類型論的に異なる複数の言語話者を対象に調査した研究がほとんどない。Odlin (1990) は母語の影響を検討するには、類型論的に異なる母語を持つ学習者を対象に調査を行う必要があることを指摘している。そこで、本研究は主題の卓越性という観点から、日本語と類型論的に類似する中国語と相違する英語を母語とする学習者を対象に、比較検討を行う。

2つめに、日本語学習者の二重主語構文の習得実態がほとんど解明されていない。その理由として、二重主語構文は使用数が限られることから、産出課題を中心とした従来の習得研究において研究対象として扱うことが難しかったことが考えられる。そこで本研究はこの問題を解決すべく、受容性判断課題を用いた調査を行い、学習者の言語知識を調査する。本研究で用いる受容性判断課題とは、ある文がどの程度受け入れられるかを段階評価で判断させる課題であり、文法性判断課題と呼ばれることもある。母語話者が持つ言語知識にはどのような文が適切かだけでなく、どのような文が不適切かという情報も含まれている (白畑他 2010 : 232)。物語発話産出課題のような産出課題ではこのうち、どのような文が適切かという言語知識、即ち学習者がある文を使用するかどうかは調べることができる。しかし、どのような文が不適切かという知識については調べることができない。さらに、産出しなかった項目については、知識があるかどうか言及することができない。学習者はその言語知識を有していたとしても、文脈上、使用されなかった可能性がある他、学習者が意図的に回避する可能性もある。一方、受容性判断課題は、不適切だという知識についても検討できる他、産出されにくい項目の知識についても測定することが可能である。

主題卓越言語において、典型的な構文である二重主語構文を対象に言語類型間の影響を体系的に検討することは、第二言語習得における普遍性と個別性の解明や、習得にかかわる要因を解明する上でも意義深い。特に今回対象とする中国語は、類型論的には日本語と同じく主題卓越言語に属し、二重主語構文を有するものの、その意味的制約では異なりがある。このような言語類型内における相違が習得にいかに関与しているのかについても本研究では併せて検討していく。

2.4 研究課題と仮説

二重主語構文に関する (1) 構文の有無、(2) Yの意味的制約という母語における特徴が第二言語習得に影響するか否かを明らかにするため、研究課題を以下のように設定する。

(研究課題1) 日本語学習者は、Yが「所有物」である二重主語構文「XハYガZ」と所有文「XノYガZ」のどちらを高く受容するか。また、母語によって受容度に差があるか。

(研究課題2) 中国語母語話者は、二重主語構文「XハYガZ」のYが「所有物」と「親族関係」のどちらを高く受容するか。

各課題に対する仮説を以下に述べる。

(仮説1) 母語における構文の類似性が影響する場合、母語に所有文・二重主語構文を持つ中国語母語話者は、二重主語構文「XハYガZ」と所有文「XノYガZ」の受容度に差がない。母語に所有文は持つが、二重主語構文を持たない英語母語話者は、所有文「XノYガZ」の受容度が二重主語構文「XハYガZ」より高い。

(仮説2) 母語における意味的制約が影響する場合、二重主語構文のYに「親族関係」を表す名詞句が許容されにくい母語を持つ中国語母語話者は、二重主語構文「XハYガZ」のYが「所有物」の受容度が「親族関係」より高い。

3. 方法

3.1 調査参加者

調査参加者は中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語母語話者）22名、英語を母語とする日本語学習者（英語母語話者）32名であった。全員が母国の高等教育機関で日本語を主専攻、あるいは副専攻として学習した経験があり、本調査実施時には日本の高等教育機関に留学中であった。調査実施前に SPOT ver.A⁵を実施し、点数

⁵ SPOT (Simple Performance-Oriented Test) は自然な発話速度で次々と読み上げられる日本語の文を聞きながら、解答用紙の空欄にひらがな1文字を書き取るというテストである。各文は互いに関連なく、独立しており、Ver.Aは65問からなる。自然な速度で聞き、即時に答えるという即時的処理能力が要求されるテストで、そのため手続き的知識の自動化を間接的に推計していると考えられ、信頼性が高い言語テストと言われている(小林他、1996)。Ver.Aは旧日本語能力試験2級に相当す

が 51 点から 65 点であった者を対象とした⁶。本研究における英語母語話者の条件として、家庭での使用言語が英語であり、留学前の生活環境が英語圏を中心としている者とした。さらに、両親のうちどちらかの母語が中国語などの主題卓越言語である場合は、対象から除外した。

比較考察のベースデータとして日本語母語話者 17 名にも調査を実施した。日本語母語話者は全員が 1 年以上海外滞在経験のない大学生、大学院生であった。

3.2 調査計画

3×2×2 の 3 要因配置を用いた。第 1 の要因は参加者の母語で、日本語、中国語、英語の 3 水準であった。第 2 の要因は構文で「X ハ Y ガ Z」(二重主語構文)と「X ノ Y ガ Z」(所有文)の 2 水準であった。第 3 の要因は Y の意味で「親族関係」と「所有物」の 2 水準であった。第 1 の要因は参加者間変数で、第 2 および第 3 の要因は参加者内変数であった。

3.3 材料

実験の課題文は、日本語の初級レベルの教科書に出現する語彙で構成し、各条件文は同じ性質を持つ品詞を用いるよう配慮した。主語となる人物は三人称であり、初級レベルで学習する漢字を組み合わせた日本人姓に統一した。述語は事象叙述(出来事、または静的事態を表す動詞：益岡 1987)に統一した。フィラー文⁷も上記の条件に従い、初級で学習する語彙、文法項目、漢字を用いて作成した。課題文として「構文(X ハ Y ガ Z/X ノ Y ガ Z)」の 2 条件と「Y の意味(親族関係/所有物)」の 2 条件からなる計 4 条件の文を作成した(表 2)。条件 A、C が各 8 文、条件 B、D が各 6 文の計 28 文に、フィラー文を加えた 260 文⁸を使用した。全ての課題文を視覚・聴覚呈示するため、心理学実験ソフトウェア E-prime2.0 を用いて実験プログラムを作成した。本調査は、漢字圏、非漢字圏の学習者を対象としていることから、課題文の呈示は視覚、聴覚により同時に行い、どちらか一方に有利な条件にならないよう配慮した。聴覚呈示用には、日本語を母語とする女性 1 名によって、ポーズや抑揚を入れずに一定速度で読み上げたものが録音され、プログラムに組み込まれた。

るとされている。

⁶ 事前調査を元に、本調査の課題遂行に支障がなく、談話産出能力を持つレベルを選定した。

⁷ 調査参加者に実験の意図や対象する項目を悟られないことを目的とする。

⁸ 270 文中 60 文は、本研究とは別の研究に用いられる課題文であった。

表 2 調査に用いた課題文例

条件	課題文例	構文	Yの意味
A	中川さんのお母さんが倒れました。	XノYガZ	親族関係
B	池田さんの眼鏡が割れました。	XノYガZ	所有物
C	中川さんはお母さんが倒れました。	XハYガZ	親族関係
D	池田さんは眼鏡が割れました。	XハYガZ	所有物

課題文の呈示、及び反応時間と回答の自動測定のために、パーソナルコンピューター（TOSHIBA dynabook SS S30 106S/2W）と周辺機器を用いた。反応時間は、学習者が呈示された文を最後まで正確に読まず、あるいは聞かずに反応した場合のデータを、収集後に除外するために測定した。聴覚呈示用には、ヘッドホンまたはイヤホンを用いた。

3.4 手続き

実験は個別形式で、6 試行の練習を経て本試行を行った。図 1 に 1 試行の流れを示す。パソコン画面の中央に課題文が呈示される合図として、注視点を 1000ms 視覚呈示した。注視点を呈示した直後に、課題文を画面に視覚呈示し、同時にヘッドホンまたはイヤホンから聴覚呈示した。調査参加者は、呈示された課題文が「日本語としてどれくらい自然だと思うか」を自然から不自然までの 4 段階（3、2、1、0）で即時にキーを押して反応するよう求められた。呈示順序はランダムであり、課題文の視覚、聴覚呈示からキーが押されるまでの時間を反応時間として測定した。課題文の最大呈示時間は 4000ms であり、反応があれば 200ms を経て次の試行に移り、最大呈示時間内に反応がなければ、200ms を経て自動的に次の試行に移るよう設定した。呈示時間の制限は、学習者の「即時処理」を保証することで、学習者の「言語知識」を引き出し、「メタ言語知識」を用いた回答を避けるために設定した。各呈示時間については、日本語学習者及び母語話者に行った事前調査をもとに決定した。課題文の呈示は 4 ブロックに分けて行われ、ブロック間には 3 分程度の休憩時間を設けた。

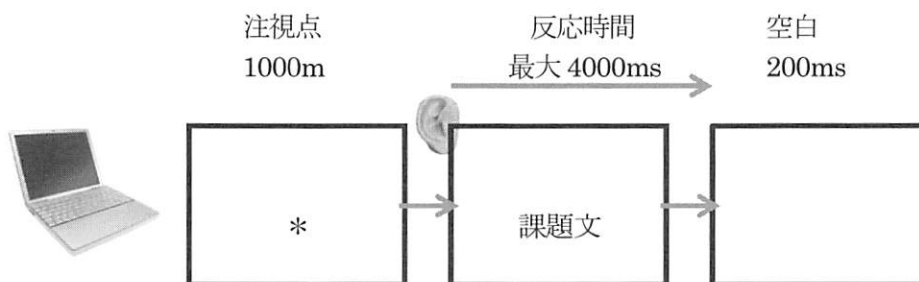


図 1 受容性判断課題における 1 試行の流れ

4. 結果

分析対象はいずれの条件も制限時間内に反応があった回答の受容度の数値 (0、1、2、3) のみとした。参加者の無反応は分析対象から除外した。さらに各条件における無反応が半数を超える参加者のデータは分析対象から除外した。また外れ値として、各協力者の条件ごとの平均反応時間と標準偏差を求め、平均反応時間 $\pm 3SD$ から逸脱したデータは分析の対象から除外した。最終的に対象となった人数は日本語母語話者 17 名、中国語母語話者 22 名、英語母語話者 27 名であった。

表 3 に調査の各条件の受容度の平均値、及び標準偏差を示す。なお、スペースの都合で、表中は「XノYガZ」文を「ノ」、「XハYガZ」文を「ハ」と示す。

表 3 各条件の受容度の平均値及び標準偏差 (SD)

課題文例	構文	Y	日本語 (SD)	中国語 (SD)	英語 (SD)
中川さんのお母さんが倒れました。	ノ	親族関係	2.87 (0.19)	2.54 (0.48)	2.35 (0.45)
池田さんの眼鏡が割れました。	ノ	所有物	2.93 (0.14)	2.48 (0.71)	2.23 (0.68)
中川さんはお母さんが倒れました。	ハ	親族関係	1.87 (0.81)	1.27 (0.80)	1.59 (0.76)
池田さんは眼鏡が割れました。	ハ	所有物	1.78 (0.79)	1.71 (0.86)	1.72 (0.69)

「XノYガZ」文でYが「親族関係」の場合の受容度は、日本語母語話者が 2.87、中国語母語話者が 2.54、英語母語話者が 2.35 と学習者の受容度が日本語母語話者よりやや低いものの、いずれも 2.0 以上で高く受容していた。「XノYガZ」文でYが「所有物」の場合の受容度も、日本語母語話者が 2.93、中国語母語話者が 2.48、英語母語話者 2.23 と「XノYガZ」文でYが親族関係の場合とほぼ同様の高い受容度を示していた。「XハYガZ」文でYが親族関係の場合の受容度は、日本語母語話者が 1.87、中国語母語話者が 1.27、英語母語話者が 1.59 であり、中国語母語話者は受容度の中間点である 1.5 を下回り、日本語母語話者と英語母語話者も 1.5 から 2.0 の間と、「XノYガZ」文と比べ全体的に受容度は低かった。最後に、「XハYガZ」文でYが所有物の場合の受容度は、日本語母語話者が 1.78、中国語母語話者が 1.71、英語母語話者 1.72 であり、中間点である 1.5 から 2.0 の間で、全体的な受容度はさほど高くなかった。

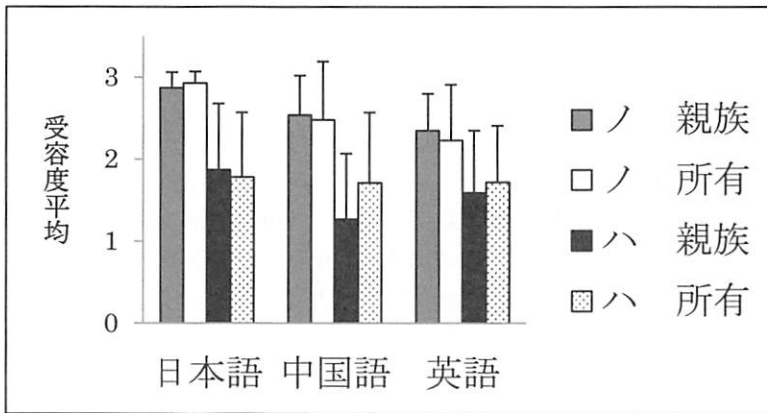


図2 各条件の受容度の平均値及び標準偏差

有意水準を1%に設定し、参加者の母語（日本語、中国語、英語）×構文（XノYガZ、XハYガZ）×Yの意味（親族関係、所有物）の3要因分散分析を行った結果、参加者の母語の主効果 ($F(2, 61)=5.10, p=.008, \eta^2=.04$)⁹、構文の主効果 ($F(2, 61)=64.12, p<.01, \eta^2=.29$) のみが有意であった。母語の主効果における Ryan's method による多重比較を行った結果、有意な差は見られなかった。構文の主効果に関しては、参加者の母語やYの意味にかかわらず、「XノYガZ」の受容度が「XハYガZ」より高かった。1次の交互作用はいずれも有意ではなかった。参加者の母語（日本語、中国語、英語）×構文（XノYガZ、XハYガZ）×Yの意味（親族関係、所有物）の2次の交互作用が有意であった ($F(2, 61)=5.17, p=.008, \eta^2=.00$) ため、下位検定を行った。その結果、中国語母語話者は構文が「XハYガZ」の場合、Yが「所有物」の受容度が「親族関係」より有意に高かった ($F(2, 122)=14.32, p<.01, \eta^2=.01$)。英語母語話者、日本語母語話者はYが「所有物」と「親族関係」に有意な差はなかった ($F(2, 122)=1.39, p=.239, \eta^2=.00$)、($F(2, 122)=0.74, p=.389, \eta^2=.00$)。

5. 考察と今後の課題

本研究では二重主語構文に関する (1) 構文の有無、(2) Yの意味的制約という母語における特徴が第二言語習得に影響するか否かを明らかにすることを目的として、受

⁹ η^2 (イータ二乗) とは、分散分析における「効果量 (effect size)」 (効果サイズ、効果の大きさ) を表す記号である (水本・竹内、2008)。効果量とは効果の大きさのことを指し、実験的操作の効果や変数間の関係の深さを表す指標である (Field & Hole 2003 : 512 ; 訳は水本・竹内、2008)。P値はサンプルサイズによって影響を受けやすく (サンプル数が増えると平均値のわずかな違いから有意差が生じる)、実質的效果が大きい小さいかについての情報をもたらすものではない。そこでサンプルサイズによって変化することのない標準化された指標として効果量を併記することで、要因の効果や変数間の関係の大きさについて読み手に知らせることができるとされている。効果量の目安としては、3要因分散分析の場合は、大 ($\eta^2=.14$)、中 ($\eta^2=.06$)、小 ($\eta^2=.01$) が提案されている (水本・竹内、2008)。

容性判断課題による検討を行った。

まず1つめの研究課題として、「日本語学習者は、Yが「所有物」である二重主語構文「XハYガZ」と所有文「XノYガZ」のどちらを高く受容するか。また、母語によって受容度に差があるか。」という検討を行った。母語における構文の類似性が影響すると仮定すれば、母語に所有文・二重主語構文を持つ中国語母語話者は、両構文の受容度に差がない一方で、母語に所有文は持つが、二重主語構文を持たない英語母語話者は、「XノYガZ」の受容度が「XハYガZ」より高くなると想定される。しかし、本調査の結果、母語×構文の交互作用が有意ではなく、母語にかかわらず「XノYガZ」が「XハYガZ」より受容度が有意に高い結果となった。つまり、母語における構文の有無が日本語文の受容に影響するという証拠は見られなかった。その理由の一つとして、本調査で用いた課題文の設定が影響した可能性が否めない。今回、「XハYガZ」文は日本語文法的に適切な文であるにもかかわらず、NSの受容度でさえ1.5をやや上回る程度とそれほど高い数値にならなかった。これについては、Xが先行及び後続文脈がない状態で呈示されたため、主題化するのに十分な動機付けがないと母語話者が判断した可能性がある。通常Yにガ格が来るタイプの文は、(文脈なしでも)文頭の名詞句に「ハ」が付与され主題として機能すると言う(益岡 1987:46)。しかし、本研究で用いたような事象が述語に来る文は、一般に有題文¹⁰になるかどうかは先行文脈によって決まる(益岡 1987; 野田 1996)という側面も持つ。そして、「文章や談話の中の文と文のつながりや、文と話の場面とのつながりをよくする(野田 1996:280)」ために主題化されるものである。今後は、先行・後続文脈を呈示するなど、主題化がより起こりやすい言語環境を設定して調査を行う必要がある。

2つめの研究課題として、「中国語母語話者は二重主語構文「XハYガZ」のYが「所有物」と「親族関係」のどちらを高く受容するか。」という検討を行った。母語における意味的制約が影響する場合、二重主語構文のYに「親族関係」を表す名詞句が許容されにくい母語を持つ中国語母語話者は、二重主語構文のYが「所有物」の受容度が「親族関係」より高いと想定される。

本調査の結果、中国語母語話者は構文が「XハYガZ」の場合、Yが「所有物」の受容度が「親族関係」より有意に高く、仮説2に沿う結果となった。さらに、英語母語話者、日本語母語話者はYが「所有物」と「親族関係」の場合、有意な差がなかったことから、中国語母語話者が独自の知識を利用して自然さを判断していたことが分かる。この結果は、中国語母語話者がYの意味的制約に関する母語の知識を日本語文の自然さを判断する際に転移させていた可能性を示すものである。

本研究の学習者は上級レベルであるが、目標言語より母語の方が、制約が厳しいことから、母語の意味的制約を手がかりにしている限り、誤用を産出する可能性はない。つまり、明示的なフィードバックを受ける機会がなく、上級レベルになっても非用と

¹⁰主題を持つ文のことを「有題文」、持たない文を「無題文」と呼ぶ。例えば「XハYガZ」が有題文であるのに対し、「XノYガZ」は無題文である。

して母語転移が残っている可能性が考えられる。これは、目標言語と母語がいずれも主題卓越言語に属しながらも、その中での意味的制約のずれが習得に負の影響を与えている例である。こうした事例をふまえると、教師は学習者の母語について構文の類似性だけでなく、意味的な制約のずれにまで予め留意して指導を行うとともに、今回対象とした二重主語構文の例ではYに様々な名詞句を挿入した例文を示すなどの工夫を行うと効果的であろう。

今後の課題として、今回の調査では上級学習者のみを対象としたが、今後は他のレベルの学習者も対象に含み、二重主語構文の習得実態のさらなる解明や、習熟度の違いが結果にどのような影響をもたらすのかについての検討が必要である。また、今回調査対象とした二重主語構文は、述語が事象を表すものに限られた。今後は述語が属性を表す二重主語構文も対象に、調査を行う予定である。

付記

本稿は、小口悠紀子 (2015) 「日本語学習者の主題の習得に関する研究」(広島大学大学院教育学研究科 博士学位論文)の一部、および2015年度日本語教育秋季大会(於沖縄国際大学)での口頭発表の一部に加筆、修正したものである。ご指導いただいた先生方、会場で貴重なコメントやご助言をくださった方々にお礼申し上げます。

また、調査に協力して下さった近藤玲子先生、佐藤有理先生、西郷英樹先生、堀内仁先生、望月圭子先生(五十音順)、ORMOND-BYRNE MARIUS LUCIUS ODIN WINIANA 氏および各教育機関の学習者の皆様に深くお礼申し上げます。

参考文献

- Chafe, M. L. (1976) Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subject, Topics, and Point of View. In C. N. Li (ed.), *Subject and Topic*. New York: Academic Press, pp.22-25.
- Field, A., & Hole, G. (2003) *How to design and report experiments*. London: Sage publications.
- 市川保子 (1989) 「取り立て助詞「は」の誤用」『日本語教育』67, pp.159-172.
- Jin, H. G. (1994) Topic-prominence and subject-prominence in L2 acquisition: evidence of English-to-Chinese typological transfer. *Language Learning*, 44(1), pp.101-122.
- Jung, E. H. (2004) Topic and subject prominence in interlanguage development. *Language Learning*, 54(4), pp.713-738.
- 木村英樹 (2002) 「中国語二重主語文の意味と構造」西村義樹(編)『シリーズ言語学 2 認知言語学 I: 事象構造』東京大学出版, pp.215-242.
- 菊地康人 (1990) 「「XのYがZ」に対応する「XはYがZ」文の成立条件—あわせて、〈許容度〉の明確化—」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集—』くろしお出版, pp.77-84.

- 菊地康人 (1995) 「「は」構文の概観」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題ととりたて』くろしお出版
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996) 「日本語能力の新しい測定法「SPOT」」『世界の日本語教育』6, pp.201-218.
- Li, C. N. & Thompson, S. A. (1976) Subject and Topic: A New Typology of Language. In C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*. New York: Academic Press, pp.457-489.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 水本篤・竹内理 (2008) 「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—」『英語教育研究』31, pp.57-66.
- 望月八十吉・望月圭子 (1999) 「いわゆる「多主語構文」の日中対照」現代中国語研究会 (編) 『現代中国語研究論集』中国書店, pp.317-345.
- Nakahama, Y. (2011) *Referent markings in L2 narratives: Effects of task complexity, learners' L1 and proficiency level*. Tokyo: Hituzi shobo Publishing.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- Odlin, T. (1990) Word order transfer, metalinguistic awareness, and constraints on foreign language learning. In B. Van Patten & Lee, J. F (eds.), *Second language acquisition / foreign language learning*. Clevedon, UK: Multilingual Matters, pp. 95-117.
- 尾上圭介・木村英樹・西村義樹 (1998) 「二重主語とその周辺—日中英対象」『月刊言語』27(11), pp.90-108.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 澤田浩子 (2010) 「「彼は親切的な性格だ」と「彼は性格が親切だ」」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹 (編) 『日本語教育研究への招待』くろしお出版, pp.251-272.
- 澤田浩子・中川正之 (2004) 「中国語における語順と主題化—主題化とその周辺の概念を中心に—」益岡隆志 (編) 『主題の対照』くろしお出版, pp. 19-42.
- 白畑和彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『詳説第二言語習得研究—理論から研究法まで—』研究社

(こぐち ゆきこ・首都大学東京)